

おいしいおかゆ

■人形■

- ・女の子
- ・お母さん
- ・おばあさん
- ・町の人 (何でも可)
- ・動物 (何でも可)

■大道具■

- ・森の中
- ・女の子の家の台所
- ・お鍋の乗ったテーブル
- ・大布 (おかゆ)

■小道具■

- ・おなべ
- ・スプーン

■ プロローグ ■

語り 「むかーし…あるところに女の子がいました…女の子はお母さんと二人きりで住んでいました…とても貧乏だったので ある日のこと…とうとう 食べるものがなくなってしまいました…そこで女子は食べ物を探しに森へ出かけていきました[森の中の景を出す]」



■ 森の中 ■

女の子 「[下手から登場]食べ物はなんにも見つからないわ…どうしよう…」

おばあさん 「[上手から登場し] おお…お嬢ちゃん…こんにちは」

女の子 「こんにちは…」

おばあさん 「お前さんは食べ物を探しているね…顔にかいてあるよ…お前さんは本当にいい子だから これからずーっと食べ物に困らないものをあげよう…[と鍋を出して]ほらこれだよ…」



女の子 「おばあさん…鍋ならうちにもあるわ…ないのは食べ物なのよ…」

おばあさん 「ほっほっほっ…わかってるよ…この鍋は不思議なお鍋でね…『小さいお鍋や煮ておくれ…』といえ ば とてもおいしいおかゆを煮てくれるんだ…それにね…こんなに小さいお鍋だけでも食べても食べてもあとからあとからおかゆが湧き出してくるんだよ」

女の子 「おかゆがずーっと出続けたらすぐにこぼれてしまうわ…」

おばあさん 「大丈夫…おかゆがいらなくなったらこうい えばいいんだ…『小さいお鍋や止^どめとくれ』ってね…間違えちゃいけないよ…『止^どめとくれ』だよ『止^どめとくれ』じゃ出続けるからね」

女の子 「ありがとう…おばあさん…でも、わたしおばあさんを知らないのにどうして親切にしてくれるの？」

おばあさん 「ほっほっほっ…わたしはお前さんをよーく知っているのさ…まあいいじゃないか…早く家に帰ってお母さんを安心させておあげ…」

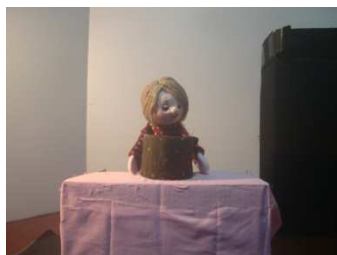
女の子 「本当にありがとう…さようなら…」

おばあさん 「はい…さようなら[二人は上手、下手にわかれる]」

■ 女の子の台所 ■

台所の背景と中央に鍋付きのテーブル

語り 「[森をかたづけ、台所の背景と中央に鍋付きのテーブルを出しながら] そこで女の子はその鍋をお母さんの所へ持って帰ってそれからというもの 二人はいつでも好きな時に おいしいおかゆを好きなだけ食べることができるので お腹がすくことはなくなりました…ところが ある日…女の子がよそへ出かけていた時のこと…お昼になったのでお母さんはおかゆを食べようと思いました…[上手からお母さん登場]」



お母さん 「娘はいないけどお腹がすいたねえ…おかゆの出し方はわかるからやってみよう…『小さいお鍋や煮ておくれ』…[鍋をのぞきこんで]まあ…おいしそうなこと…さあ…いただきますよう

[とスプーンで食べ始める]…ああおいしい…不思議ねえ…毎日食べても食べ飽きないわ…ほんとにおいしい…パク パク パク…[スプーンを置いて]ああおいしかった…ごちそうさま[一礼したとき鍋から少しおかゆが見え出す]あらあ…おかゆがこぼれちゃう…もったいない もったいない…早く止めなきゃ…『小さいお鍋や止めとくれ』……あら…どうしたのかしら…声が小さかったのね…[前より大きな声ではっきりゆっくりと]…『小さいお鍋や止めとくれ』…[もちろん止まらず、その間にもおかゆは鍋からあふれどンドン出てきてテーブルを覆ってしまうのであわてて]まあ…どうしましょう…呪文が違っていたのね…では『小さいお鍋や止まってね』『小さいお鍋やよしとくれ』『大きいお鍋や戻ってね』[その間にもおかゆはどンドン増えて舞台全面に広がりお母さんパニック]うわあーっ 助けて…[おかゆに飲み込まれる]



語り

「[舞台中おかゆが揺れ動いている]さあ大変 お母さんが呪文を一文字間違えたのでお鍋はいつまでもいつまでも グツグツグツグツグツグツ…おかゆを煮ていたのだから おかゆは お鍋のふちからどンドンこぼれ出してきた…グツグツグツグツグツグツ…台所がおかゆでいっぱいになり…グツグツグツグツグツグツ…家じゅうがおかゆでいっぱいになっても…グツグツグツグツグツグツ…家の前の道も 隣の家もおかゆでいっぱいになっても…グツグツグツグツグツグツ…お鍋はまるで世界中をおかゆでお腹いっぱいにしてしまいたいと思っているように いつまでもいつまでも…グツグツグツグツグツグツ…おかゆを煮続けているものだから 町じゅうが大騒ぎになってしまいました…[語りの中に町の人や動物たちが次々おかゆの中から顔を出して消える]でも だーれも どうすればいいかわかりませんでした…とうとうおかゆの流れこんでいない家は町であと一軒…ということになった時 ほら…女の子が帰って来ました…[女の子が上手袖に登場]そして たった一言…どうぞっ[と女の子を紹介]

女の子 「小さいお鍋や止めとくれ…」

■ エピローグ ■

語り 「女の子がそういうと お鍋はピタッと煮るのを止めました…
[おかゆ動きを止める]でもねえ…それから長い間…この町へ帰
ってくる人たちは 自分の通る道をパクパク食べて 食べて
食べ抜けなければなりませんでした…おしまい」

演出ノート

- ✚ 有名なグリム童話で本来語り聞かせに向いていますが、このバージョンでは進行役の語りですすめながら、おかゆが町にあふれ出る場面を見せ場に人形劇にしたものです
- ✚ お母さんが止める呪文を言い間違える演出にしました…
- ✚ お母さんのあわてぶりを面白く演じることで正しい呪文を言えない不自然さを感じさせません
- ✚ おかゆに見立てる布はテーブル内に収納しておき、裏から徐々に出して拡げていきます…
- ✚ 舞台全体を隠してしまうぐらい大きい方がインパクトがあります…ここではキルト芯を使いました
- ✚ おかゆにおぼれる町の人や動物を出す演出はおまけのサービスですからはなんでも大丈夫…(布のあちこちに切り込みを入れておき、そこから顔を出す演出がおもしろい)
- ✚ 二人で操作できるなら、一人が女の子と舞台変換を担当し、もう一人が語り、お母さん、おばあさんの三役を演じるのがおすすめ
- ✚ ぜいたくに3名以上いる場合は語り手を独立させましょう